

ポーラ・コレクション	
輝きはじめた女性たち 一旅する化粧道具―	[2～5]
レオナルド・ダ・ヴィンチ展を振り返って	[6]
[福井県立美術館もの知り事典①] 岡倉天心と福井の関わり	[7]
平成21年度移動美術館敦賀展	[7]
福井県立美術館友の会 鉛筆デッサン講座	[7]
お知らせ・貸館情報	[8]
所蔵品によるテーマ展	[8]
福井県立美術館 来春の企画展案内	[8]

表紙:「ポーラ・コレクション 輝きはじめた女性たち一旅する化粧道具―」展より



輝きはじめた女性たち

旅する化粧道具

美

しくありたいと願うのは女性の永遠のテーマですが、人と接する機会が増え、活動の場が広がるとき、その思いはさらに加速します。そうした美への強烈な欲求は、20世紀前半に、目覚ましい社会進出を遂げた欧米の女性たちから湧き出し、その高揚していくエネルギーは化粧というものを一般化させ、やがては日本にもうねりとなって到達しました。それは歴史のなかで化粧が容認されるようになった時代であり、美しく生きようと願う女性たちが輝きはじめた時代でもありました。

急速な産業の発達に歩調を合わせて一気に社会に躍り出た女性たちは、労働のみならず、スポーツやレジャー、社交を楽しむほか、汽車や自動車などの交通手段の発達によって、どこにでも移動できる身軽さを手に入れました。かつては大型・中型の旅行ケースに化粧の必需品を詰め込んでいましたが、これとともに、気軽に使えて持ち運びに便利な小型の携帯用化粧道具が登場するようになります。その代表ともいえるコンパクトやリップスティックなどは人前で化粧直しをすることを考慮して、見た目にも優美で、デザイン性、利便性を備えたものが数多く生み出されるようになり、お洒落に敏感な女性たちを喜ばせました。

日本にも波及したこの美に対する自覚は、和風から洋風の化粧へ、日本髪から洋髪へと和洋入り乱れて美容界の一大変革を巻き起こし、社会で働き始めた女性たちはコンパクトや棒口紅などを使った新しい化粧を追求していきます。

本展では西洋の旅行ケースや携帯用コンパクト、日本の同時代における化粧箱や髪飾りなど、女性の社会進出によって移り変わっていく東西の化粧道具やファッションに焦点をあわせ、今日も昔も変わらずに、世界中の女性の魅力を最大限に引き出すために彼女たちとともに変遷していく化粧道具の果てなき旅を展望します。

開催期間: 2009.10/24(土)～11/23(月・祝) / 主催: 福井県立美術館 / 共催: 福井新聞社 / 後援: NHK福井放送局、FBC福井放送、福井テレビ、FM福井、福井県美容業生活衛生同業組合 / 特別協力: ポーラ文化研究所 / 協力: 財団法人ポーラ美術振興財団、ポーラ美術館 / 企画協力: 株式会社アートプランニング レイ / 会場: 福井県立美術館 / 開館時間: 午前9時～午後5時 (入館は午後4時30分まで)、金曜日は午後8時まで (入場は午後7時30分まで) / 休館日: 11月9日(月)、11月16日(月) / 観覧料: 一般800円、大高生500円、中小生300円 (30名以上の団体は2割引)、身体障害者手帳等所持者とその介護者1名半額 (ただし原則として手帳等に介護印などのある方のみ)

【関連企画】

■講演会

■日本髪との出会い (結髪実演会)

■担当学芸員によるギャラリートーク

開催日: 10月25日(日) 午後2時～3時 (於当館講堂) ※参加費無料

講師: 富澤洋子氏 (ポーラ文化研究所研究員) 演題: 「輝きはじめた女性たち」

内容: 現在につながる化粧がはじまった1900年代から1930年頃の女性のおしゃれの様子

開催日: 11月14日(土) (於展覧会場) ※展覧会チケットが必要です。

◎午前11時～ 燈籠髻 ※歌麿の美人画に描かれる女性はほとんどこの髪形をしています。

◎午後2時～ 横兵庫 ※太夫の髪型で大変華やかなものです。

結髪師: 林照乃氏 講師: 村田孝子氏 (ポーラ文化研究所主任研究員)

開催日: 11月3日(火・祝)、11月21日(土) 午後2時～ (於展覧会場) ※展覧会チケットが必要です。



■燈籠髻 (安永～寛政)
ポーラ・コレクション



■横兵庫 (文化・文政)
ポーラ・コレクション

「女性たちの化粧部屋」

化粧道具は美に敏感な女性たちの要求に応じて、常に最新の流行と素材を取り入れながら姿を変えていきました。日々の営みの中で女性たちのもったもたいたところに置かれた化粧道具は、当時の美意識や化粧の変遷を知る上で貴重な資料となります。



五三桐紋蒔絵婚礼化粧道具 明治時代

江戸時代の形を踏襲しつつも形は小ぶりで、道具の中身も和鏡からガラス製の合わせ鏡へと変化し、外国製の銀製の皿が添えられるなどの新しさが見られます。また、日本の代表的な化粧法であったお歯黒や眉を剃り落として描く眉化粧は、幕末から明治にかけて来日した外国人から奇異な風習とみられたため徐々に廃れ、この道具の中にも姿を見つけることはできません。年齢や既婚、未婚が分かるこれまでの通過儀礼的な化粧法から、西洋の影響を受けた白い歯と生来の眉を生かす現代の化粧へと変わっていく様子がこの道具からうかがえます。

白粉三段重 江戸時代末期～明治時代

白粉を入れたり、水で溶いたりするのに使われていました。



「白 浮世五色合」 歌川国貞改二代豊国 弘化4年(1847)
合わせ鏡で襟足を見る当時の女性の姿です。白粉は顔だけではなく、首から胸のあたりまでつけるのがエチケットでした。

イニシャル入り化粧セット

19世紀末 オーストリア

19世紀末頃の様式雑誌には化粧風景を描写したものや、化粧セットの広告が掲載されるようになり、化粧人口が徐々に広がっていったことがうかがえます。



粉白粉 昭和時代

明治時代以降は、西洋の自然な肌色の白粉も使われるようになりました。白粉といえば白という先入観のあった日本女性たちですが、実際に使ってみるとその自然な仕上がりに満足し、やがてこのナチュラルメイクが女性の社会進出と時期を同じくして普及していきました。

モノグラム入りガラス化粧セット

1920～1940年代頃

20世紀に入るとガラスメーカーやガラスデザイナーも化粧瓶や化粧容器などを手がけるようになりました。



イリュージョン・ダムール フェイスパウダー

ドージー 1920～1930年頃 フランス

「旅の携帯化粧道具の 移り変わり」



化粧ケース 19世紀

化粧瓶、パウダーボックスなどの化粧容器、マニキュアセット、服ブラシなどが納められています。



青皮製旅行ケース 1930年代頃

ゆったりと衣装を入れるスペースも確保されたおしゃれな旅行ケースの中には、青のエナメルが施された化粧用具が入っています。この頃には電気によるパーマメントウェーブが開発されているので、これまでのようにウェーブ用コテやアルコールランプを自ら持ち歩く必要がなくなりました。



バック型コンパクト
1920～1950年代



房付き蝶文様
パウダーコンパクト
1920～1930年代



金属製梅模様コンパクト
1910～1950年代



花模様コンパクト
ストラットン
1920～1950年代頃
イングランド



地球儀型
パウダーコンパクト
1910～1950年代

下部はフェイスパウダーを入れるようになっていますが、容器全体は世界地図を描いた地球儀の形をしています。



バラ模様木製漆塗りコンパクト
1910～1950年代 日本

「コンパクト いつでも携帯できる小型の化粧道具の誕生」

コンパクトは当初ヴァニティケースといわれていましたが、1920年代頃からコンパクトと呼ばれるようになりました。中には小型のパフとパウダーを備えたり、チークルージュやリップスティックを内蔵するものも出てきました。社会参加の機会が増えた女性たちにとって、こうした携帯できる小型の化粧道具の誕生は、非常に喜ばしいことであつたに違いありません。化粧はもはや、陰で行うものという考え方から、人前でも化粧直しができるという意識に変わり、人に見られることを前提としたデザイン性の高い優れたコンパクトが数多く生み出されました。

「レオナルド・ダ・ヴィンチ展」 を振り返って

レオナルド・ダ・ヴィンチの「もう一つの遺産」とも言うべき、手稿や素描の貴重なファクシミリ版（精密復刻版）と、それに基づいて制作された体験型の模型・デジタル画像などを合せて展示し、万能の天才レオナルドの創造力に迫る展覧会「レオナルド・ダ・ヴィンチ 一天才！の創造力―」が夏休みに合わせて開催されました。「レオナルドの橋」組立ワークショップ、「最後の晚餐」高精細デジタル版などのレオナルドの天才を体感する展示とともに、関連企画として講演会「授業 楽しくわかるレオナルド」、学芸員によるギャラリートークが行われました。

* * * *

暗闇に照らし出された古びたノートたち。500年という時を超えて、ひとたび頁が開かれると、そこには驚くべき世界が待っている。びっしりと書き込まれた文字は左右が反転していて、鏡に映さなければ読むことが出来ない。さらに、頁には設計図のようなスケッチが無数に現れる。暗号のような文字を鏡に映して解読し、設計図を丹念に読み取り、現実の機械に組み立てると、奇跡のマシンたちが甦る。

コウモリの翼をヒントにした足こぎ式の羽ばたき飛行機。スクリュー状の羽根を回転させて空中へ舞い上がるヘリコプター。現代のチョロQと同じ原理で自走する自動車。パラシュート、戦車、果ては自動焼肉機まで、50を超えるアイデアがノートから現実の世界に飛び出す。

ノートの作者は、レオナルド・ダ・ヴィンチ。今夏、県立美術館には「万能の天才」レオナルド・ダ・ヴィンチの頭脳を、まるごと体験する世界が出現した。

見るだけでなく、動かして体験するマシンもある。アイデアはコンピュータ上でも再現され、ゲーム感覚で操作することも可能である。くぎ等を一切使わない携帯用の「レオナルドの橋」は、大きな再現模型を見ながら、ミニチュア版の組立に挑戦することが出来る。緻密なマシンの世界に原寸大で再現された、名画「最後の晚餐」は、その周到に計算された表現を際立たせる。会場では、「画家」レオナルドというイメージが、まばゆい創造のパワーを放つ「知の巨人」へと変貌し、観るものを飲み込んで行く。

ルネサンスと呼ばれる、レオナルドの生きた時代には、芸術家と職人の区別はなかった。科学と芸術もまた明確な境界を持たなかった。未発達が遅れた時代であろうか。人間の創造力が未だ若々しく時には野蛮であり、より自由に羽ばたく時代ではなかったか。レオナルド・ダ・ヴィンチが開くのは、私たちの世紀が希求する新たな創造力の飛翔である。

* * * *

今回の展覧会は、来場者の方々にとって「レオナルド・ダ・ヴィンチのもうひとつの遺産」が開く人類の宝ともいえるべき智慧と実践の世界に驚きをもって触れる絶好の機会になったのではないかと思います。期間中は夏休みということもあって、子ども達や親子連れなどを中心として大勢の方々に鑑賞していただくことができました。ありがとうございました。（主任学芸員 野田訓生）



■ヴァーチャル・アトランティコ手稿
最新の3DCGで再現されたレオナルドのアイデアを、ゲーム感覚で体験



■「レオナルドの橋」組立ワークショップ
くぎ等を一切使わない驚きのテクニック。ミニチュア版の組立に挑戦



■「最後の晚餐」高精細デジタル版
世界遺産の名画を迫力の大画面で体感！



■【授業】楽しくわかるレオナルド
講師：松田重昭氏（とちぎ蔵の街美術館館長）
8月9日／14:00～ 美術館講堂にて



■学芸員によるギャラリートーク
8月2日、17日／14:00～



岡倉天心と福井の関わり

「福井県立美術館もの知り事典」①

岡倉天心(1863～1913年)は、福井藩士岡倉勘右衛門の次男として横浜に生まれました。父勘右衛門は下級武士ではありませんが、経理に長け商才があることを見込まれ藩命で士籍を離れ、藩の特産品である生糸や羽二重などを扱う貿易商石川屋の支配人となっていました。商店の切り盛りで忙しい両親に代わって天心を養育したのは、乳母のつねで、彼女は幕末の志士で福井藩士であった橋本左内の身内といわれ、幼い天心に福井と左内のことを何度も話して聞かせたと伝えられています。そのため天心は横浜生まれでありながら、自身について語るとき「旧福井藩士」(自筆履歴書)や「郷里福井」(明治39年書簡)と記しており、福井に対する想いには格別なものがあつたようです。

また三国の出身で、当時東京美術学校彫刻科の教授であつた

山田鬼斎(1864～1901)には、天心の妹蝶子(てふ)が嫁いでいます。さらには美術学校の第一期生で、狩野芳崖門下の四天王に数えられた福井出身の岡不崩(1869～1940)と天心の甥岡倉秋水(1868～1950)は、天心の要請で一時期高等師範学校に図画教員として派遣されています。二人は毛筆画用教科書を制作するなど日本画教育の普及に貢献しており、福井の地とそこにゆかりのある人々がさまざまな形で天心の理想の実現に関わつたといえるでしょう。

近代日本美術の先駆者岡倉天心の両親が共に本県出身であることから、福井県立美術館では天心ゆかりの作品を収集・所蔵しています。

(「福井県立美術館もの知り事典」は今号より連載します。)

平成21年度 移動美術館 敦賀展

福井県立美術館では、当館のコレクションを多くの方々に鑑賞していただくために、毎年、敦賀・小浜の両市で「移動美術館」を開催しています。今年度の敦賀展は、9月6日(日)から19日(土)まで、敦賀市の「プラザ萬象」を会場に、昨年度に当館が新たに収集した作品と、従来から当館で所蔵しているレンブラント、ゴヤ、ゴーギャン、ピカソといった西洋版画など29点を展示しました。また今年度導入した「所蔵品検索システム」の体験コーナーや、県立美術館の紹介コーナーを設けるなど、例年とは異なった趣向で開催しました。来館された人達は東洋西洋の作品を興味深げに鑑賞するとともに、当館についての理解も深めておられたようでした。



福井県立美術館

友の会

鉛筆デッサン講座

平成21年5月21日(木)～7月23日(木) 毎週木曜 13:30～16:30 (計10回)

福井県立美術館友の会では会員の方を対象に鉛筆デッサン講座を開きました。デッサン講座は絵を描く際に基礎となるデッサンを学んでいただくもので5年前から始めています。最初3年間は木炭デッサンでしたが、日本画を描く人にも有益なため、2年前から鉛筆デッサンに変更しました。参加者は油絵であれ、日本画であれ、ほとんどなにかをされているケースが多く、5年連続で参加した人もいます。彼らは講師も驚くほどの熱心さで講座へ通い、慣れた人になると10回の講座の間に5、6点のデッサンを仕上げていました。

美術館には以前から友の会の会員に限らず広く一般の方が参加できる実技講座もありますが、友の会のデッサン講座は「絵を描く以前の基礎」を学んでいただくところに特徴があります。美大受験志望者の行く予備校といった特殊な場は別として、一般の美術愛好家が参加できる場所は意外と少ないのが実情ではないでしょうか。受講生は次のように語っていました。

「今まではキリなく好きに描いていたが、これからは自分の絵を見直して描いていける。」「デッサンが狂っていても、今まではどこをどうすればいいのかわからず直しようがなかったが、これからは大丈夫。」「最初と比べて今では物を見ることができるようになったし、我ながら上達したと思う。」

ただ絵を描いているだけでは満足できない、もう一歩先へ進みたい。そのような願望が起きたとき、やはり基礎に立ち返るということなのでしょう。デッサン講座は今年も好評のうちに終了し、受講生の成果は平成22年3月10日(水)～3月14日(日)に本館で開催される「友の会実技講座受講生作品展」で発表されます。



展示替え、館内メンテナンス等のため、以下のとおり休館とさせていただきますのでご了承ください。

11月9日(月)、16日(月)、24日(火)～26日(木)、30日(月)、12月1日(火)、2日(水)、7日(月)、21日(月)、29日(火)～31日(木)、1月1日(金)、2日(土)、12日(火)～14日(木)、2月15日(月)～25日(木)

貸館情報 [11/5～2/28]

11/ 5～11/ 8 ● 第43回彩美会日本画展	12/18～12/20 ● パッチワーク合同作品展 三国洋子手芸サークル	2/ 3～ 2/ 7 ● 福井大学教育地域科学部美術教育 サブコース卒業・修了制作展
11/10～11/15 ● 第11回絵画グループ「樹」作品展	12/24～12/27 ● 第59回福井書法展	2/ 5～ 2/ 7 ● 福井工業大学建設工学科建築 学専攻卒業研究展
11/19～11/23 ● 日本風景写真協会 福井支部展	1/ 7～ 1/11 ● 日象福井支部展	2/ 6～ 2/ 7 ● 科学技術高校テキストスタイルデ ザイン科卒業制作展
11/27～11/29 ● 第39回若越書道会展	1/ 7～ 1/11 ● アートリラとアート楽 合同絵画展	2/11～ 2/14 ● 第30回記念日本墨書会展
12/ 3～12/ 6 ● 第59回福井県勤労者美術展	1/ 7～ 1/11 ● 4 つ の 個 展	2/12～ 2/14 ● 第6回藤島高等学校書道部展
12/ 3～12/ 6 ● 全国大学・高専卒業設計展示会	1/15～ 1/17 ● 第57回福井奎星書展 一会員展・公募展	2/12～ 2/14 ● 福井高等学校芸術科アートデ ザインコース卒業制作展
12/ 4～12/ 6 ● “2009世界の児童画フェス ティバル(福井展)”	1/20～ 1/24 ● 第9回福井一陽会 新春展	2/13～ 2/14 ● 春の水石展
12/10～12/13 ● 第14回謙慎書道会甲信北越展	1/22～ 1/24 ● 第37回一書会展	2/26～ 2/28 ● 福井大学書道部卒部制作展
12/15～12/20 ● 第22回美浜美術展	1/29～ 1/31 ● 第42回洗心小品展	
12/16～12/20 ● 第30回記念啄の会洋画展	1/29～ 1/31 ● 書勢会会員展・学童競書展	
12/17～12/20 ● 第23回新彫会彫刻展		

所蔵品によるテーマ展

第7回所蔵品によるテーマ展

「近現代の日本画」

10/24(土)～11/23(月)

※休館日は11/9(月)・16(月)

菱田春草の名作「落葉」を展示します。今年度最後ですのでお見逃しなく。

主な作品 ● 菱田春草「落葉」、小林古径「摂収」、村上華岳「蓮華座上観音」、加山又造「駱駝と人」

【同時開催】 ポーラ・コレクション 輝きはじめた女性たち ー旅する化粧道具ー



菱田春草「落葉」

第8回所蔵品によるテーマ展

「近現代福井の洋画」

12/4(金)～1/11(月)

※休館日は12/7(月)・21(月)・29(火)～1/2(土)

大正から昭和にかけて福井で活動した前衛美術運動北荘・北美の作家や、鈴木千久馬・西山真一をはじめとする福井ゆかりの洋画家たちの作品を展示します。

主な作品 ● 鈴木千久馬「四人の女」、西山真一「雨あがり」、小野忠弘「無題」

新春特別展示

「屏風絵の美」

1/3(日)～1/11(月)

※期間中無休

当館のコレクションから、日本画の伝統的形式である「屏風」に焦点を当て、その美をご紹介します。

主な作品 ● 曾我直庵「松柏に鷹図屏風」、鍋木清方「江の島図屏風」

第9回所蔵品によるテーマ展

「岡島コレクション

／工芸の美」

1/16(土)～2/14(日) ※期間中無休

福井県大野市出身の岡島辰五郎氏が収集したコレクションと併せて、当館所蔵の工芸品を展示します。

主な作品 ● 無銘 後藤宗乗「狂獅子図目貫」、海野勝珉「風吹牡丹図緒締」、初代越前康継「刀」、加藤唐九郎「志野茶碗 銘 苔屋」

福井県立美術館 来春の企画展案内

【開催期間】

2/26(金)～3/28(日)

アート

疾走する日本車

ー1960年代を主軸とする国産車の軌跡ー



トヨタ2000GT
ボンドカーMF10型 (1966・日本)
トヨタ博物館蔵

右は
第13回東京モーターショー (1966)
写真＝株式会社ニ玄社 CG Library



我が国で初めて自動車が走り出し、驚きと羨望の眼差しをもって受け入れられてから約百年という時が経過しました。いつしか自動車は、日本の各メーカーによって量産されるようになり、現在では世界有数の自動車生産国として、世界トップクラスの性能とデザインを誇るまでになりました。

本展では、日本車が加速度的に成熟したといわれる黄金期ー1960年代を主軸とする10数台の実車の展示によってカー・スタイリング／デザインの変遷を追い、同時にそれらを生み出す過程のデザイン画、試作モデル、宣伝広告等を展示することによって、当時の日本の自動車文化そのものを検証します。